

# 実践的指導力育成に向けた「音楽科教育法」の授業実践と考察

松 浦 修

Teaching Practice and Consideration of “Music Education Method”  
for Fostering Practical Teaching Skills

MATSUURA Osamu

## 要　旨

神戸女学院大学の教職課程における音楽科教育法の授業において、初めて模擬授業を行う大学生16名を対象に、9つの段階で構成される模擬授業の指導を行った。指導の最終段階において、それぞれの学生は中学生を想定した30分の音楽の模擬授業を行った。これらの模擬授業について14の観点で構成される評価シートに基づいて評価を行った。得られた16の模擬授業の評価結果を分析したところ、授業を構成する9つの観点（導入の工夫、話し方の工夫、発問の工夫、作業指示の工夫、意見発表の工夫、指導の工夫、評価の工夫、時間配分の工夫、学習のまとめの工夫）において、教員養成における実践力指導力向上の課題が明らかとなった。

**キーワード：**音楽科教育法、模擬授業、授業実践、実践的指導力

## Summary

In the class of music education method course of the teacher training program at Kobe College, the teaching guidance of a trial lesson with 9 teaching stages was provided to 16 college students who experienced the lesson for the first time. In the last stage, each student conducted a 30 minute-music trial lesson for junior high school students. The trial lesson was assessed by an evaluation sheet consisting of 14 viewpoints. Analyzing the evaluation results of 16 trial lessons, it was clarified that the study found issues in 9 viewpoints as structuring the lesson: ingenuity of introduction, way of speaking, questioning, work instruction, view/opinion presentation, guidance, evaluation, time management, and summarization of learning contents.

**Keywords:** music education method, trial lesson, teaching practice, practical teaching skills

## はじめに

本学に着任して1年、音楽学部で中学校および高等学校教員（音楽）の免許資格取得を目指し教職課程を履修する大学生を対象に、教科指導における実践的指導力を備えた教師を育てるべく、その教育に取り組んできた。ここでいう教科指導における実践的指導力とは、以下の2点を目指すものである。

- ア) 生徒・児童に音楽の基本的な知識・技能を習得させるのみならず、教科指導において生徒・児童の思考力・判断力・表現力を引き出して育てることができる教師
- イ) 知識や技能を活用した学習活動や課題探求型の学習や協働的学びなどをデザインできる指導力を備えた教師

これらの資質能力は、平成24年8月に公開された中央教育審議会による「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」の答申の中で、高度化・複雑化する諸課題への対応ができる人材育成や多様な人間関係を結んでいく力の形成重視という現状と課題をうけ、これから教員に求められる資質能力として示されたものである<sup>1)</sup>。教職課程においても、教職生活全体を通じてこのような実践的指導力を高めることが求められている。

そのことを踏まえ、教科教育法における実践的指導力向上の授業開発に向け、9つの段階で構成される模擬授業の指導をデザインし、筆者が担当する2016年度の「音楽科教育法Ⅱ」の授業で実践した。

本稿では、9つの段階で構成される「音楽科教育法Ⅱ」における模擬授業指導の授業実践の概要を示し、実践成果として得られた受講生による模擬授業に対する14項目の観点による評価結果を分析し、教員養成における実践的指導力向上の要点について考察する。

### 1 研究の目的

教員養成における実践的指導力向上の要点を見出し、音楽科教育法の指導における今後の指針を得ることを目的とする。

### 2 研究の方法

2016年度の音楽科教育法Ⅱを受講した大学生16名を対象に、9つの段階で構成した模擬授業の指導を行う。次に、最終段階で行われる受講生による模擬授業を観察し、14項目の観点で評価し記録する。得られた評価記録を分析し、学生が模擬授業を実施するにあたり直面する問題点の傾向を探り、教員養成における実践的指導力向上の要点について考察する。

---

1) 文部科学省（2012）p.2

### 3 音楽科教育法Ⅱの授業実践

#### 3-1 授業の位置づけ

神戸女学院大学音楽学部で教職課程を履修する学生は、教育職員免許法施工規則に定める科目のうち、「教育課程及び指導法に関する科目」の「各教科の指導法」として位置づけられた「音楽科教育法Ⅰ」を3年次前期に、「音楽科教育法Ⅱ」を3年次後期に履修する。また、高等学校教諭一種免許状（音楽）のみならず中学校教諭一種免許状（音楽）の取得を目指す学生については、これに加え「音楽科教育法Ⅳ」を3年次後期に履修する。音楽科教育法Ⅰでは、青少年期における音楽科の意義と役割、中学校・高等学校学習指導要領（音楽）の内容、日本の伝統音楽とその指導法、表現と鑑賞の2領域の指導法、教材研究の方法、学習指導案作成の手立てについて学び、教科指導法の基礎理論を習得する。音楽科教育法Ⅰを終了した学生は音楽科教育法Ⅱへと進み、模擬授業による実践的な教科指導法を習得し、4年次の教職課程で最も重要な「教育実習」に備える。

#### 3-2 受講生の内訳

神戸女学院大学で2016年度の音楽科教育法Ⅱを受講した学生は16名で、内訳は、3年生13名、4年生1名、科目等履修生2名であった。

#### 3-3 テキスト

中等科音楽教育研究会編『最新中等科音楽科教育法（改訂版）』、文部科学省『中学校学習指導要領（平成20年）解説 音楽編』、『高等学校学習指導要領（平成21年）解説——芸術編、音楽編、美術編——』をテキストとした。また、模擬授業の中で扱う教科書として、教育芸術社『中学生の音楽1』、『中学生の音楽2・3上』、『中学生の音楽2・3下』、『中学生の器楽』をテキストとした。

#### 3-4 模擬授業の指導

本節では、筆者が2016年度の音楽科教育法Ⅱのクラスで行った模擬授業の指導を報告する。模擬授業の指導は、以下の9つの手順で構成した。

1. オリエンテーション
2. 指導法研究：音楽の授業に存在する3つのコミュニケーションの認知と活性化による授業づくり
3. 教材研究と授業の構想づくり
4. 学習指導案の作成
5. 担当教員による教案の個別指導
6. 模擬授業の事前準備
7. 模擬授業の実施

8. クラス全体による相互評価
9. 担当教員による事後の振り返り個別指導

これらの手順は、PDCAサイクルで構成した。以下に授業の流れの概略を示す。最初に音楽の授業には3つのコミュニケーションが存在すること、それらの双方向の関係を活性化させることが、音楽の授業に活気をもたらすという研究に触れ、その手法を用いた指導法研究を受講者間で行った。

次に、その手法を用いた30分の模擬授業を計画するように課題を課した。模擬授業の一連の指導は、Plan(手順2～6)-Do(手順7)-Check(手順8)-Action(手順9)の流れに基づいて行った。受講生は、模擬授業までは個別に課題に取り組み、担当教員は模擬授業の前後に授業を行う受講生に対する個別指導を行った。具体的な手順は以下の通りである。

### 3-4-1 オリエンテーション

初回授業において、授業の目的と到達目標、授業の概要と授業計画について説明し、中学生を対象とした30分間の模擬授業を受講生全員が行うことを行った。また、模擬授業が、学習指導案の作成と提出→教案の個別指導→模擬授業の事前準備→模擬授業の実施→クラス全体による評価→事後の振り返り個別指導という流れに従って行われることを説明した（図1）。

次に、それぞれの受講生が行う模擬授業の日程を決定した。音楽科教育法Ⅱの授業時間は90分であったため、1人の受講生の持ち時間を模擬授業30分間とクラス全体による評価15分間の計45分間とし、1回の授業で2名の受講生が模擬授業を行えるよう計画した。その上で、模擬授業の1週間前までに学習指導案を作成のうえ提出し、指導者による個別の教案指導を受けるよう課題を課した。その際、授業の中で指導法研究が行われることを予告し、学習指導案の

### 模擬授業の流れ

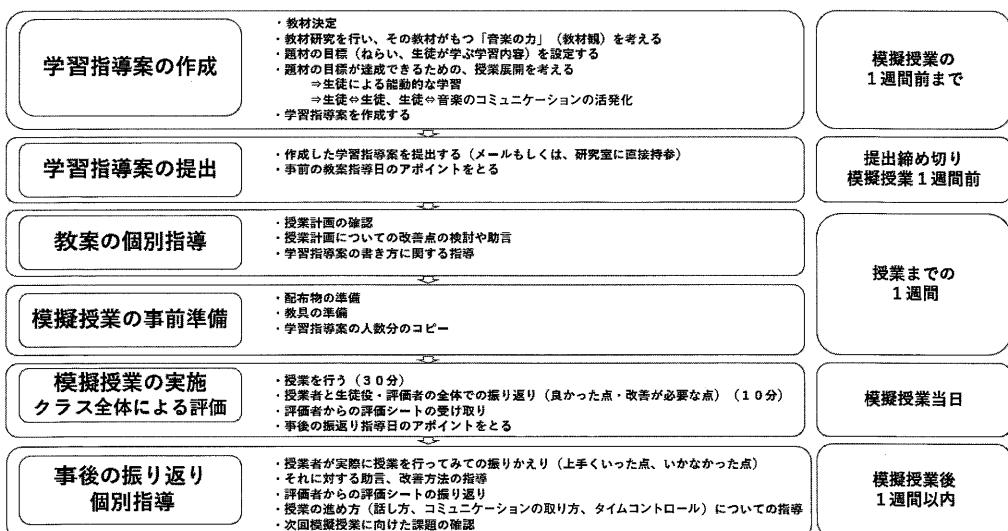


図1 受講生へ配布した資料

作成に際しては、その内容を踏まえ、創意工夫を行うように指示した。

### 3-4-2 指導法研究：音楽の授業に存在する3つのコミュニケーションの認知と活性化による授業づくり

音楽の授業には3つのコミュニケーションが存在すること、それらの双方向の関係を活性化させることができることが、音楽の授業に活気をもたらすという研究について紹介し、受講者間で意見討議を行った。

最初に、中島・高倉・平野（2016）らによる、コミュニケーションでつくる音楽の授業に関する研究内容を受講生に示した。音楽の授業には①音楽↔子ども、②子ども↔子ども、③教師↔子どもの3つのコミュニケーションが存在し、教師からの一方通行的な授業ではなく、これらのコミュニケーションによる双方向的な関係の中で子ども達は「音楽の力」を育てる、という考え方である<sup>2)</sup>。

この考え方に対し、受講生間で意見討議を行った。討議の方法としては、受講生に中学校・高等学校の経験を振り返り、音楽の授業が楽しいと思った時と楽しいと思わなかった時について、具体的にどのような場面であったか、そして何故そう思ったのかについて、その理由をできるだけ多く挙げさせた。次に、それぞれの理由が、音楽↔子ども、子ども↔子ども、教師↔子ども、の3つの関係性のうち、どの関係性に属するものであるかに分類をさせた。そして、その関係性におけるコミュニケーションの双方向の度合いについて、肯定的な理由と否定的な理由の比較を行わせた。その結果、受講生が音楽の授業が楽しかったとして挙げた肯定的な理由のその全てにおいて、音楽の授業が楽しくなかったという否定的な理由と比べ、コミュニケーションすなわち双方向のやり取りの度合いが活発であるという結論に至った。また、否定的とされる理由についても、その背景となるコミュニケーションが改善されれば、肯定的な要素に転換されるであろうという意見もみられた。

このようにして、活気のある音楽の授業づくりに向けて、その活気は、音楽の授業に存在する3つのコミュニケーションの活性化によりもたらされること、教師はその双方向の関係性を意識的に捉え、それらの関係性を活性化させるべく創意工夫を行うことが大切であるということを伝えた。受講生に対しては、授業で行う模擬授業の実施にあたっても、教師として、このコミュニケーションの認知と活性化による授業づくりの視点をもち、授業計画および授業実施においては、創意工夫を十分に行うように求めた。

### 3-4-3 教材研究と授業の構想づくり

教材研究と授業の構想づくりを、どのような手立てで進めればよいかについて示した。模擬授業で扱う教材については、教育芸術社『中学生の音楽1』、『中学生の音楽2・3上』、『中学生の音楽2・3下』、『中学生の器楽』から受講生が選択をすることとし、活動領域については、表現および鑑賞からの自由選択とした。

授業の構想を練る前に、まずは教材研究が重要であることを告げ、授業で扱う教材がどのよ

2) 中島寿・高倉弘光・平野次郎（2016、pp. 6-26）

うな「音楽の力」をもつかについて十分に研究をするよう指示した。具体的な研究項目として、教材（作品）がもつ音楽的特徴や魅力、作曲された背景、当日の時代や社会状況との関わり、作曲家自身に関する情報、形式や調性といった作品分析、歌詞の内容、学習指導要領の指導内容との関わり、共通事項との関わり、を挙げた。教材が備える音楽の力をすべて洗い出し、その中から、自分が授業を通して伝えたいことが何か、焦点を絞り教材観を設定するように指示した。

教材研究の次に行うのが、授業の構想づくりとなる。作曲でいうスケッチと考えられる。自分がどのような授業を行うのかについて、ブレインストーミングしメモをとりながら、授業をデザインしてゆく。構想づくりにあたっては、題材の目標（授業のねらい）を最初に明確に設定するように指示をした。本時の展開を先に考えた上で、題材の目標が設定されるようなことがあってはならず、自分の行う授業で何を伝えたいのか、自分の授業を受けたことで、児童・生徒がどのように成長するのかについて、明確に設定するよう告げた。

題材の目標を設定した後に、題材の目標の達成に向けた授業展開の検討を行うように指示した。検討にあたっては、生徒が受動的ではなく能動的に学習ができる展開の工夫、子ども↔子ども、子ども↔音楽、子ども↔教師のコミュニケーションの活性化にむけた工夫をとり込むよう告げた。授業展開の組み立てを行う際は、授業のねらいに向けて、活動をどのように段階的に組み立ててゆけば、児童・生徒がねらいに到達しやすいのか、児童・生徒の思考の過程により添い、検討を行うように示した。

#### 3-4-4 学習指導案の作成

授業の構想を、学習指導案に記述する手立てについて、確認した。前期に行った「教科教育法Ⅰ」の授業の中で、受講生は学習指導案の記述方法について、基礎理論は習得済みである。題材名、題材の目標、生徒観、教材観、指導観、学習指導要領との関連、評価基準の設定、指導・評価計画、本時の学習指導の展開について記述することとし、題材は2時限構成とした。学習指導案の作成に使用するメディアはワードとした。学習指導案は、模擬授業の1週間前までに提出することとし、ワークシートを使用する場合は、使用するワークシートを指導案に添えて提出を行うように指示した。

#### 3-4-5 担当教員による教案の個別指導

学習指導案が提出された後、担当教員は模擬授業を行う受講生に対し、個別の教案指導を行った。受講生が提出した指導案をもとに、教材選択の理由と教材研究の成果、題材設定の理由、指導計画、本時の展開について打ち合わせを行い、受講生には問題点を指摘し、教案を修正するように指示した。

以下は、この指導の過程で見られた問題点である。

- 学習指導案の記述内容が具体性に乏しく、意図が伝わるように記述されていない
- 本時の展開において、生徒の思考・判断の過程が丁寧に描かれていない

- 本時の展開の時間配分に無理がある
- 生徒の反応やつまずきがしっかり想定されていない
- 学習指導要領の指導事項との対応関係が不明確
- 教材研究が不十分で音楽的価値と教育的価値が不明確
- 評価基準の内容が具体的に示されていない
- 授業のねらいに向けた学習活動に一貫性がない
- 評価計画に無理がある
- 板書計画が効果的でない

### 3-4-6 模擬授業の事前準備

模擬授業に向けた準備を、十分に行なうよう指示した。授業展開を把握し、発問計画をたて、学習指導案を見ることなく模擬授業が実施できるよう、各自で予行を重ねるように指示した。模擬授業後には、クラス全体による評価を行うため、学習指導案を受講生全員に配布ができるように、人数分を持参するよう指示した。模擬授業に必要な教具類（マグネットシート、マグネット、マーカー、模造紙）については、授業担当者より貸し出した。模擬授業を行う教室の設備は、グランドピアノ、黒板、机、椅子、教卓、テレビモニター、CD、DVD、スピーカーであった。

### 3-4-7 模擬授業の実施

模擬授業は、授業者1名、生徒役15名で実施した。生徒役となる受講生には、授業態度や教師への反応等、すべて授業者が設定している学年の生徒になりきるよう指示した。実際の教育現場では、それぞれの児童・生徒に個性があり、静かでおとなしい、にぎやかで騒がしい等、様々である。教師はその児童・生徒に柔軟に対応し、その児童・生徒にあった教室の空気感づくりが求められる。模擬授業においては、生徒役が授業者に協力的である方が授業者は授業を進めやすくなるが、あえて、授業が面白くないと感じた場合は隣の生徒と私語を行うことや、あまり歌わない、授業に集中しない等、授業者の授業内容にあわせて、率直な反応を行うよう告げた。授業者に対しては、授業規律の確保、集中していない生徒への働きかけ、教室の空気づくりを含め、指導課題を課した。

### 3-4-8 クラス全体による相互評価

模擬授業の終了後、行われた授業に対する相互評価を、クラス全体で15分間実施した。授業者、生徒役のそれこれから、行われた授業に対する意見発表を行い、よかつた点や改善が必要とされる点について、相互評価を行った。

### 3-4-9 担当教員による事後の振り返り個別指導

模擬授業終了後、担当教員は授業を行った受講生に対し、個別の振り返り指導を行った。振り返り指導は、担当教員からのフィードバック、授業者からの授業を実際にやってみて上手く

といった点、いかなかつた点、予測と異なった点、難しさを感じた点等についてのヒアリング、評価シートの分析、により行った。これらにより、授業を行った受講生の課題を明確化した。それに対し、担当教員は具体的な助言と改善方法の指導を行った。

以上が、音楽科教育法Ⅱで行った模擬授業指導の概要である。指導の最終段階において、受講生16人全員が中学生を想定した30分間の模擬授業を行った。これらの模擬授業について、担当教員は14の観点で構成される評価シートに基づく評価を行った。

以下に、その評価の方法について示す。

## 4 模擬授業の評価

### 4-1 評価シート

模擬授業の評価シートは、教員の指導力向上をめざした研修用として、高知県教育センターが公開している模擬授業・研究授業チェックシートをもとに、担当教員が受講生の実態に合わせ、一部編集を加え作成した。

授業を9つの場面に分け、教師の指導14項目の観点について、3段階（A、B、C）評価で構成した<sup>3)</sup>。

### 4-2 評価の方法

教室全体が見渡せる教室の後部から、授業者の言動、生徒の様子や反応を詳細に観察しながら、3段階（A、B、C）評価で記録した。

## 5 結果と考察

### 5-1 模擬授業の評価結果

#### ○導入の工夫

- (1) 導入の雰囲気づくりにおいて、生徒の興味・関心を引くような工夫をしていたか
- A. 本時の学習内容につながる導入で、生徒の興味・関心をひくことができていた = 4名
  - B. 興味・関心をひこうと工夫していた = 4名
  - C. 工夫はしているが、興味・関心をひくことができていない = 8名
- (2) 導入のねらいの提示において、本時のねらいが明確に示せていたか
- A. 導入の工夫から、本時のねらいを明確に示せていた = 2名
  - B. 本時のねらいを示していた = 10名
  - C. 本時のねらいを示さなかった = 4名

---

3) 本稿の5-1参照

## ○話し方

- (3) 明瞭な話し方、聞きやすい音量になっているか
- A. 話し方に熱意が感じられ、声に力があり、声量も聞きとりやすい = 2名
  - B. 明瞭な話し方、聞きやすい音量になっている = 14名
  - C. 言葉に力がなく、声も聞きとりにくく = 0名
- (4) 声の大きさやスピードが適切であるか
- A. 声の抑揚や話す時の間を効果的にとり入れている = 2名
  - B. 声の大きさやスピードが適切である = 12名
  - C. 早口で内容がわかりづらい = 2名
- (5) 生徒を引きつける表情、動作ができているか
- A. 豊かな表情や身振りや手振りを交え、生徒を引きつけられている = 2名
  - B. 生徒を引きつける表情、動作ができている = 8名
  - C. 表情に変化がなく、身振りや手振りもなかつたりする = 6名
- (6) 生徒が理解できるような話し方の工夫がみられるか
- A. 生徒の実態に応じた話し方をしている = 2名
  - B. 生徒が理解できるような話し方を工夫している = 12名
  - C. 生徒の実態に応じた話し方になっていない = 2名

## ○発問

- (7) わかりやすい発問をしているか（意味がきちんと通じているか）
- A. 発言を投げ返したり、思考を深めたりするなどして、生徒の発言を生かしている = 2名
  - B. わかりやすい発問をしている = 6名
  - C. 発問が聞こえなかつたり、発問の意味がわからなかつたりする = 8名

## ○作業指示

- (8) 具体的でわかりやすい指示をしているか
- A. 具体的でわかりやすく、作業の内容に迷いのない適切な指示をしている = 2名
  - B. わかりやすい指示をしている = 5名
  - C. どのような作業をすればよいのか、指示の意味がわからなかつたりする = 9名

## ○意見発表

- (9) 一部の生徒に偏ることなく発表を求め、授業を進めているか
- A. 生徒の意見を全体に投げ返すなどして、生徒全体を生かすようにしている = 0名

- B. 一部の生徒に偏ることなく発表を求め、授業を進めている = 10名  
C. 一部の生徒だけに偏っている = 6 名
- (10) 生徒が意見を発表しやすいように工夫が見られ、意見を活発に引き出しているか
- A. 生徒が意見発表しやすいように工夫が見られ、意見を活発に引き出している = 2 名  
B. 生徒の意見を活発に引き出している = 8 名  
C. 生徒が意見を発表しにくく、意見が引き出せていない = 6 名

#### ○指導

- (11) 教室全体に目がゆき届き、生徒一人ひとりの様子を把握できているか
- A. 授業に集中して取り組めていない生徒を把握し、適切な指導を行えている = 4 名  
B. 教室全体に目がゆき届き、生徒一人ひとりの学習の様子を把握できている = 6 名  
C. 学習意欲のない生徒に気づいておらず、授業に参加していない状態のまま放置されている = 6 名

#### ○評価

- (12) うなずいたり、ほめたりしながら授業を進めているか
- A. うなずいたり、ほめたりすることで生徒の活動や理解が促されている = 9 名  
B. うなずいたり、ほめたりしながら授業を進めている = 7 名  
C. 生徒の発言を評価しない = 0 名

#### ○時間

- (13) 授業が順序立てで進められているか
- A. 授業の展開が適切で、授業が効果的に進んでいる = 2 名  
B. 授業が順序立てで進められている = 7 名  
C. 授業が順序立てられておらず、展開が適切でなくなっている = 7 名

#### ○学習目標

- (14) 本時のねらいを踏まえ、授業で一番伝えたいことが何であったか、適切にまとめたか
- A. 本時のねらいを踏まえ、授業で一番伝えたいことが何であったかが示され、学習でどのようなことを学んだかが適切に示された = 3 名  
B. 授業で一番伝えたいことが何であったかを示している = 5 名  
C. 授業で一番伝えたいことが何であったかが示されず、まとめがなく授業が終わった = 8 名

## 5-2 考 察

### 5-2-1 導入の工夫

「導入の雰囲気づくりにおいて、生徒の興味・関心を引くような工夫をしていたか」（1）に対し、8名（50%）が「C. 工夫はしているが、興味・関心をひくことができていない」にのぼった。導入の工夫をしようと、生徒と会話をする姿勢は窺えるものの、十分な会話が行われず、不自然な雰囲気のまま授業に入る傾向があった。授業の冒頭である為、授業者側の緊張が背景にあったと思われる。予め本時のねらいに繋がる話題を準備しておき、生徒と意識的に何往復かのコミュニケーションをとり、教師と生徒の距離感を縮め、生徒に教師の話を聞く姿勢を生み出す工夫が課題である。

また、「導入のねらいの提示において、本時の狙いが明確に示せていたか」（2）に対し、10名（62.5%）が「B. 本時のねらいを示した」であったが、「A. 導入の工夫から本時のねらいを明確に示せていた」はわずか2名（12.5%）に留まった。導入の工夫から本時のねらいの提示へと結びつける工夫が課題である。

### 5-2-2 話し方の工夫

「明瞭な話し方、聞きやすい音量になっているか」（3）に対し、14名（87.5%）が「B. 明瞭な話し方、聞きやすい音量になっている」と非常に多かったものの、「A. 話し方に熱意を感じられ、声に力があり、声量も聞きとりやすい」は2名（12.5%）に留まった。「C. 言葉に力がなく、声も聞きとりにくい」は0名であった。模擬授業を行うにあたり、準備を行なってきた授業を成功させたいという意欲は、全ての受講生から感じられた。その意欲が自然に声の大きさへと繋がっていたのではなかろうか。授業者としての意欲的な姿勢を大切にし、より言葉に力をもたせ、熱意が伝わってくる話し方の工夫が課題である。

また、「声の大きさやスピードが適切であるか」（4）に、12名（75%）が「B. 声の大きさやスピードが適切である」と多かった一方、「A. 声の抑揚や話す時の間を効果的にとり入れている」は2名（12.5%）に留まった。声に抑揚をつけ、言葉のスピード感の緩急を大切に、間のとり方も意識的に使い分ける工夫が課題である。

また、「生徒を引きつける表情、動作ができるか」（5）に対し、8名（50%）が「B. 生徒を引きつける表情、動作ができる」であったが、「A. 豊かな表情や身振りや手振りを交え、生徒を引きつけられている」は2名（12.5%）に留まり、「C. 表情に変化がなく、身振りや手振りもなかったりする」も6名（37.5%）と多かった。日常生活では家族や友人との会話において、大きな身振りや手振りを交えて話す場面は限定的であろう。しかし、授業という、1名対集団という関係においては、教師がダイナミックな表現力を用いてこそ、生徒の心に届く可能性が芽生えるものだ。豊かな表情や身振りや手振りを交え話す工夫が課題である。

また、「生徒が理解できるような話し方の工夫がみられるか」（6）に対し、12名（75%）が「B. 生徒が理解できるような話し方を工夫している」と多かったが、「A. 生徒の実態に応じた話し方をしている」は2名（12.5%）に留まった。授業者の発言を詳細に観察すると、生徒

の実態を踏まえていない発言が多く見られた。例えば、楽譜に書かれている音楽用語について何も説明がされず、シンコペーションなどの複雑なリズムがでてきても、理解されているであろうという（無意識の）前提により、授業が行われる等、生徒の実態を踏まえていない言動が見受けられた。わかりやすい丁寧な言葉づかいで話すことのみならず、生徒の実態に応じた話し方の工夫が課題である。

### 5-2-3 発問の工夫

「わかりやすい発問をしているか（意味がきちんと通じているか）」（7）に対し、6名（37.5%）が、「B. わかりやすい発問をしている」であったが、「C. 発問が聞こえなかったり、発問の意味がわからなかったりする」が8名（50%）と多かった。また、「A. 発言を投げ返したり、思考を深めたりするなどして、生徒の発言を生かしている」はわずか2名（12.5%）であった。発問を行うということは、教師と生徒との間でコミュニケーションをとる場面だと捉えてよいであろう。多く見られた傾向であるが、言葉の具体性が不十分、文章の主語や目的語の省略、伝えたい言葉が見つからない等により、伝えたい思いや内容は頭にあるものの、どのように言葉で表現したらよいのかで困惑する授業者が非常に多かった。また、発問とは生徒への問い合わせであり、教師が意図する答えを示さず、生徒にあえて問い合わせることにより思考させ、自ら気がつけるように導く行為である。授業者が発問し生徒が答えるが、それが期待するような答えでなかった場合、授業者が意図する答えをすぐに告げてしまう傾向が見受けられた。発言を投げ返したり、思考を深めたりするなどする発問の工夫が課題である。

### 5-2-4 作業指示の工夫

「具体的でわかりやすい指示をしているか」（8）に対し、5名（31.25%）が、「B. わかりやすい指示をしている」であったが、「C. どのような作業をすればよいのか、指示の意味がわからなかったりする」は9名（56.25%）と多かった。また、「A. 具体的でわかりやすく、作業の内容に迷いのない適切な指示をしている」は2名（12.5%）であった。授業者の言語能力の向上が課題である。

### 5-2-5 意見発表の工夫

「一部の生徒に偏ることなく発表を求め、授業を進めているか」（9）に対し、10名（62.5%）が、「B. 一部の生徒に偏ることなく発表を求め、授業を進めている」であったが、「C. 一部の生徒だけに偏っている」も6名（37.5%）と比較的多く、「A. 生徒の意見を全体に投げ返すなどして、生徒全体を生かすようにしている」は0名であった。一部の生徒だけに偏って発表を求める授業者は、教師に近い距離の生徒（特に、一番前に座る生徒）や、積極的な姿勢で発言を行う生徒に偏って、何度も指名する傾向が見受けられた。また、生徒の発表した意見を、教師が仲介者となり、クラス全体に伝わりやすい表現に言い換えて伝えることも、生徒同士の意見を交流させる活動においては、大切な手法となる。生徒の意見を全体に投げ返すなどで、生徒全体を生かす工夫が課題である。

また、「生徒が意見を発表しやすいように工夫が見られ、意見を活発に引き出せているか」(10)に対し、8名(50%)が、「B. 生徒の意見を活発に引き出せている」であったが、「C. 生徒が意見を発表しにくく、意見が引き出せていない」も6名(37.5%)と多く、「A. 生徒が意見発表しやすいように工夫が見られ、意見を活発に引き出せている」は僅か2名(12.5%)であった。発問の場面における(7)の考察と同じく、意見発表を求める際には発問の工夫が教師には求められる。生徒との積極的な会話を通じて意見を引き出してゆけるよう、生徒が意見を発表しやすいような工夫が課題である。

#### 5-2-6 指導の工夫

「教室全体に目がゆき届き、生徒一人ひとりの様子を把握できているか」(11)に対し、6名(37.5%)が「B. 教室全体に目がゆき届き、生徒一人ひとりの学習の様子を把握できている」であったが、「C. 学習意欲のない生徒に気づいておらず、授業に参加していない状態のまま放置されている」も6名(37.5%)と多く、「A. 授業に集中して取り組めていない生徒を把握し、適切な指導を行えている」は4名(25%)であった。模擬授業の設定として、生徒役となる受講生に対し、全員が協力的な中学生を演じる必要がないこと告げていた。隣の生徒との私語や、居眠り、教師の話を聞いていない生徒を演じたが、授業者から、授業に参加できていない生徒への指導が行われないケースが多かった。理由を尋ねたところ、授業の展開に集中しており気がつかなかつた、という授業者が多かった。教室全体に常に目をゆき届かせ、授業に集中して取り組めていない生徒を把握し、適切な指導を行う工夫が課題である。

#### 5-2-7 評価の工夫

「うなずいたり、ほめたりしながら授業を進めているか」(12)に対し、7名(43.75%)が、「B. うなずいたり、ほめたりしながら授業を進めている」であり、「A. うなずいたり、ほめたりすることで生徒の活動や理解が促されている」も9名(56.25%)と多く、「C. 生徒の発言を評価しない」は0人であった。授業の中で、生徒が何か意見を発表したり、気づきを口にしたり、演奏が行われた場合は、教師はそれに対して、何らかの評価を示すことが大切である。生徒が意見を発表したものに対して、その内容がもし間違っていたとしても、否定的な言葉で間違いを指摘することはあってはならない。「そういう考え方もあるよね」や「一生懸命よく発表したね」と、ポジティブワードに変換することを指導した。模擬授業においても、生徒に対して否定的な態度をとった授業者はいなかった。

#### 5-2-8 時間配分の工夫

「授業が順序立てて進められているか」(13)に対し、7名(43.75%)が、「B. 授業が順序立てて進められている」であったが、「C. 授業が順序立てられておらず、展開が適切でなくなっている」も7名(43.75%)で、「A. 授業の展開が適切で、授業が効果的に進んでいる」は2名(12.5%)であった。学習指導案で計画した時間配分通りに授業を進められなかつたと口にする授業者が多かった。学習指導案の時間設定に最初から無理がある場合は、現実的な設

定を行えるようスキルの改善が必要である。しかし、多くのケースにおいて、生徒の反応にあわせ授業の進め方を調整したがために、時間通りに進まなかった場合が多かった。授業が予定よりも遅れ始めると、授業者は最後まで終えられないのではと焦りを感じ、予定していた段取りを省略したり、活動の流れを急遽変更したり、グループワークの時間を短縮したりして、なんとか最後まで到達しようとする傾向が多く見受けられた。しかし、そのような計画性のない教案修正は、綿密に生徒の思考の過程を踏まえて築き上げた授業展開を崩壊させる。授業といふものは、学習指導案通りに必ずしも進まないものであると認識し、生徒の理解度や学習の質を授業全体の視点から大きく捉え、適切な教案修正を行う工夫が課題である。

### 5-2-9 学習のまとめの工夫

「本時のねらいを踏まえ、授業で一番伝えたいことが何であったか、適切にまとめたか」(14)に対し、5名(31.25%)が「B. 授業で一番伝えたいことが何であったかを示している」であったが、「C. 授業で一番伝えたいことが何であったかが示されず、まとめがなく授業が終わった」が8名(50%)と非常に多く、「A. 本時のねらいを踏まえ、授業で一番伝えたいことが何であったかが示され、学習でどのようなことを学んだかが適切に示された」は僅か3名(18.75%)であった。授業が時間通りに進まず、まとめが慌ただしく行われる授業者が多く見受けられた。たとえ予定していた最後まで授業がたどり着かなかつたとしても、授業終了の5分前になった時点で、その日の学習内容を生徒とともに振り返り、本時のねらいに対してどこまで歩み寄ることができたのか、学習成果を確認することが大切となる。授業のまとめの場面では、本時の狙いを踏まえ、授業で一番伝えたいことが何であったかを示し、学習でどのようなことを学んだかを示す工夫が課題である。

## 6 結 語

本科目を受講した受講生の全員が、音楽科教育法Ⅰで理論的学習は行ったが、実際に模擬授業として授業を行うのは初めてであった。授業を受ける側と授業を行う側では、視点がこのようにも大きく違うのかということを、多くの学生が口にした。しっかりととした教育目標のもとに授業が計画されることで、生徒は学力を確実に身につける。また授業実践においても、教師の人間力、指導力、展開のデザイン力によって、授業を受ける生徒の学習成果さらには教科そのものへの関心・意欲が大きく左右される。本科目を受講した学生には、単に授業を行うというところに留まるのではなく、音楽を好きだという子ども達を育て、生涯学習として音楽と豊かに付き合ってゆく支えとなる音楽の力を育てられる教師となってほしい。そのための実践的指導力ではなかろうか。

今回の研究成果をもとに、模擬授業の指導に改善を加え、実践的指導力育成に向けた教員養成における授業改善を検討する。また本研究で明らかとなった、学生の多くに見られた課題の解決に向け、実践的指導力向上の研究を継続してゆく所存である。

## 参考文献

- 1) 文部科学省 (2012) 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申)  
([http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afolderfile/2012/08/30/1325094\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afolderfile/2012/08/30/1325094_1.pdf), 2016年10月 6 日閲覧)
- 2) 中島寿・高倉弘光・平野次郎 (2016) 『音楽の力×コミュニケーションでつくる音楽の授業』, 東洋館教育出版
- 3) 小村聰 (2015) 『中学校音楽科授業成功の極意』, 明治図書
- 4) 原田徹 (2011) 『中学校新学習指導要領の展開音楽科編』, 明治図書
- 5) 高知県教育センター (2005) 「校内研修サポートブック～指導力向上をめざして～」([http://www.kochinet.ed.jp/center/supportbook/Q\\_A.pdf](http://www.kochinet.ed.jp/center/supportbook/Q_A.pdf), 2016年 8 月10日閲覧)
- 6) 国立教育政策研究所教育過程センター (2010) 「特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）」([http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei\\_ongaku/houkoku\\_zentai\\_001.pdf](http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_ongaku/houkoku_zentai_001.pdf), 2016年12月10日閲覧)
- 7) 石原陽子 (2011) 「教師の『実践的指導力』育成に関する考察—新任教師の属性に着目して», 『ペール学院大学研究紀要』, 第51号, 203-216
- 8) 森保尚美 (2015) 「『初等音楽科教育法』における学習指導案作成に関する研究」, 『広島女学院大学児童教育心理学研究紀要』, 創刊号, pp. 47-57

（原稿受理日 2017年 2 月19日）